

利用・用途・応用分野

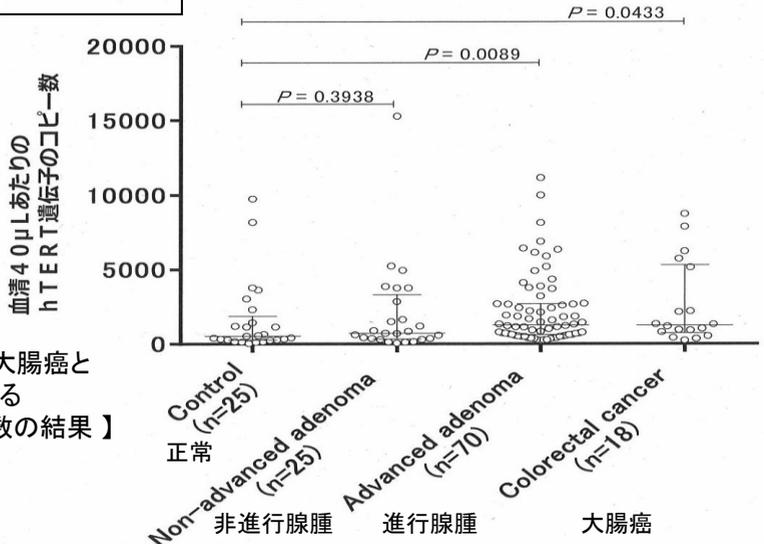
がん検診、医療現場、被検対象における前癌病変又は癌の有無の予測

目的・課題

被検対象から得たDNAを解析することで、被検対象における前癌病変または癌の有無予測を補助する方法の提供を目的とする。「前癌病変」とは、正常組織よりも癌を発生しやすい状態へと形態学的に変化した組織。具体的には、大腸癌の前癌病変は大腸進行腺腫(Advanced adenoma)、胃癌は癌化との関連性が認められる1mm以上の過形成ポリープ(Hyperplastic polyp)や5mm以上の胃腺腫(adenoma)が挙げられる。

解決ポイント

- (a) 被検対象から採取された生体試料中の二本鎖DNAの濃度又は量の測定工程;
 - (b) aで測定した二本鎖DNAの濃度又は量が所定のカットオフ値以上の場合に被検対象にて前癌病変又は癌を有する予測の補助工程;
- にて被検対象における前癌病変または癌の有無予測の補助方法を行う。



【正常、非進行腺腫、進行腺腫、大腸癌と判断された患者それぞれにおける血清中 hTERT 遺伝子のコピー数の結果】

研究概要・アピールポイント

- ◆被検対象における前癌病変又は癌の有無の予測を非侵襲的、低コスト、簡易に補助することが可能となる。
- ◆前癌病変や癌の初期段階でも、前癌病変又は癌であることが予測できる

◆ お問合せ先 ◆

有限会社山口ティール・エル・オー TEL: 0836-22-9768 E-mail:tlojim@yamaguchi-u.ac.jp